径二六㎞であり、噴出物の総量は1.1×10¹¹トンに及び、このように巨大なカルデラでは九州の姶良火山に匹敵すると考えられる。以上に述べた事から次のようなことが考えられる。スマンカ湾奥から西北方向に続くスマトラ断層に伴う地溝構造の延長は西ジャワの重力異常には全く認められない。すなわちスマトラ断層はスンダ海峡で終っている。この事実は二〇〇〇㎞にも及ぶスマトラ断層の活動はスンダ海峡の拡大後に始った事を示唆している。さらにホンジェからシブシ島を経てクラカタウ島へ続く第四紀から現世への火山列があるが、その延長上にウジュン・クーロン北方を中心とする巨大カルデラがあると考えられる。さらにスンダ海峡の海底地形からはこの火山列と並行に、ランポン湾から南北に伸びる断裂の存在が示唆される。ランポン湾北方にはスカダナ台地玄武岩が広く分布しているが、この玄武岩の K-Ar 年代は約二〇〇万年である。ジャワ島とスマトラ島の相対運動はスカダナ玄武岩の出噴をもって始ったと考えるならば、その開始時期は二〇〇万年前ということになろう。ウジュンクーロンからクラカタウにかけての火山活動は約一〇万年前に始まり、上記の断裂線と並行して起きたと考えることができる。さらにスマトラ断層の活動はそれに引き続くインド洋プレートの斜めの潜り込みとともに始まり、二〇〇〇㎞に及ぶ右ズレ断層を形造ったものと考えられる。

唐代華厳教家の研究
——復礼を中心として——

一色順心

一

華厳教学の大成者法蔵（六四三—七一二）とほぼ同時代に生き、『十門弁惑論』二巻や『真妄頌』の作者としても知られる人に復礼がいる。復礼は、武周朝期（六九〇—七〇五）を中心に行なわれた仏典翻訳事業に参加し、地婆訶羅（六一二—八七）より実叉難陀（六五二—七一〇）に至る、当時に続々と来支した翻訳三蔵のもとで、法蔵らとともに訳業に従事したといわれている。この翻経沙門復礼をただちに華厳教学の枠内の人としてみなすことはできないが、訳業において法蔵と同学であること及び『真妄頌』が後代の澄観（七三八—八三九）や宗密（七八〇—八四一）に与えた影響などを考えるとき、復礼と華厳教学との関わりは少なからざるものがあると思われる。復礼に関する従来の研究成果には、脇谷撝謙「復礼法師の真妄頌」（『六条学報』一二五号、明治45年3月）、鎌田茂雄「真妄論に対する澄観の見解」（『中国華厳思想史の研究』五二五—三七頁、昭和40年3月）などがあって、復礼の『真妄頌』とそれに対する諸師の答頌について詳細に論述されている。また『十門弁惑論』二巻についての註釈書には、江戸時代に作成された知空の『裨検』（正徳六年刊）と臥雲の『纂述』（寛保二年刊）がある。

『真妄頌』と『十門弁惑論』とは、その著作の動機や内容が異なっており、その二書が翻経沙門復礼によって著された。このことは復礼という人物の多岐性を物語っている。しかも復礼自身は生没年ともに不詳の人であるという。本稿においては、各種の伝記資料や経録及び華厳典籍などを手掛りとして、復礼の人物像とその思想の一端を考察することを目的とする。

二

『十門弁惑論』は、復礼の著作の中では経録に表われる唯一の著作であり、例えば開元十八年（七三〇）成立の『開元釈教録』巻九に、「十門弁惑論二巻答太子文学権無二釈典稽疑或三巻」（大正55・五六四b）とあり、続いて復礼の伝記が略示されている。経籍を司る官職にあった太子文学権無二が、仏教に疑問をもち仏教に矛盾があるのではないかと考えて、その稽疑を復礼に問い、対して復礼が十種の門を設けて答えた。その解答の方法は当然、仏教の立場からであるが、該博なまでの外典に対する知識を応用しつつなされたのである。それ故に、門外漢の権無二にとっても納得のゆく返答であった。そのような復礼の学的傾向は『開元釈教録』巻九（大正55・五六四b）における略伝によっても窺える。すなわち、復礼の学は内外典に通じ、もっとも賦詠にたくみであり著述をよく行なった。そして俗流の名士はみな復礼を仰ぎ慕ったという。また永隆二年（六八一）に『十門弁惑論』が撰成され、問者権無二がこれを読了したとき旧来の疑問がただちに解決されたといい、この論が人々にとって「万代の亀鏡」となるべきことを説示している。略伝の最後に、彼の著述には『文集』という書物が世に流布していたことを付記している。

権無二が稽疑した内容は、『維摩経』『法華経』『涅槃経』『観無量寿経』等の大乗仏典に登場する著名な物語を題材としてこれを小乗的な立場から難じたもののようである。しかし彼の疑難の中には儒典に関する造詣の深さと仏典に対する鋭利な問題意識を感ぜしめる点がないわけではない。例えば「観業救捨門第七」（大正52・五五四c）にみられる頻婆娑羅と阿闍世の救・不救の問題である。すなわち、頻婆娑羅が阿闍世のために幽閉されつつも、まだ生命をながらえていた。仏の大悲神力は譬えば芥子粒に須弥山を納めるほどに広大なはずであるにもかかわらず、なぜ仏は頻婆娑羅を救わなかったのか。それに比して阿闍世の瘡痏に至っては彼の生命を延ばさしめたという。賢父たる頻婆娑羅を救わずして何故に逆子たる阿闍世を救ったのか。権無二の稽疑に対して、復礼は業の問題として論じ、業の感報に三時の不同があると述べる。権無二は業に報があることを知っているが、いまだ報に時があることを知らない。つまり現報業と生報業と後報業という三時の不同があることを根拠にしたうえで、本来救うべくして救わなかった頻婆娑羅と、救うべからずして救ったところの阿闍世の物語を、仏教の正当性を明すものとして述べたのである。

三

不生不滅と生滅との非一非異、真如と無明との関係を如何に解明するか。中国仏教に展開された各々の教学の中では、真妄論に関して多様な議論が繰広げられた。とくに華厳教学においては『起信論』解釈に基づきつつ、それを真妄交徹として教学の中に位置づけるに至っている。法蔵の『起信論義記』には、真妄を三種の論難にまとめ、水波の譬喩を導入しながらその難を解明しよ

うとする試みがなされた。一方、復礼の場合は、真妄に関する問題点を五言十句の頌文にまとめて、この『真妄頌』をもって当時の仏教界に問題を投掛けたといわれる。この頌がどの時期に作成されたのかは現存の資料に依るかぎり確定することはできない。答頌を残した学匠、例えば安国寺利渉は、『宋高僧伝』巻十七（大正50・八一五a）によれば、玄奘門下で開元年中（七一三―七四一）に安国寺において華厳経を講じたことが知られる。澄観や懐暉（『宋高僧伝』巻十所出）などの答頌者に比較して利渉の場合は、復礼の『真妄頌』作成時に存命であった可能性が強い。利渉については、牧田諦亮「唐長安大安国寺利渉」（『東方学報』京都、第三一冊、昭和36年3月）によれば、近来、敦煌文書の中から利渉に関する資料が発見されたことが示されている。ところで伝記資料に限定して『真妄頌』を取上げると、復礼がこの頌を作成したことを最初に記載したのは『宋高僧伝』巻十七、復礼伝であったといえる。すなわち「作二真妄頌一問二天下学士一、擊和者数人、当二草堂宗密師銓択臻一極、唯清涼澄観得二其旨趣一、若二盧郎之来粒一矣」（大正50・八一二c）とあるがごとくであり、宗密の所説を借りてただ澄観のみが答頌としての旨趣を得ていたことが明らかにされている。多くの翻訳事業に携わるとともに俗流の名士にも慕われていた復礼が、何故に真妄の関係如何を世に問うたのか。『十門弁惑論』の中ではその博学ぶりを発揮した復礼が、『真妄頌』においてはあたかも権無二のごとき問者の側に身を処したことになるわけである。『演義鈔』巻五十八に、真妄頌の文が「如二復礼法師有レ遣レ問云一、真法性本浄、妄念何由起、許二妄従レ真生一、此妄安可レ止、無レ初則無二末、有レ終応レ有レ始、無レ始而有レ終、長懐レ懼二斯理一、願為開二秘密一析レ之出二生死一」（大正36・四六四c）とある。この頌の各句について、澄観は自身の縁起論に立脚した真妄説を通して明確な答釈を与えたのである。真妄という、ともすれば各宗の教学の枠内に止まりがちな問題が、復礼の『真妄頌』という波紋によって後代の仏教教理にとって共通した論点が見出されたのである。

四

復礼が仏典の翻訳事業に対して功績を残した人であることは、各種の経録や伝記資料の記すところである。儀鳳年間（六七六―八）の初めに地婆訶羅が来支したころより、先天二年（七一三）に義浄が病没するころまでの三十数年の間には、菩提流志、提雲般若、実叉難陀などの翻訳三蔵が洛陽及び長安において盛んに翻訳をなした。これらの三蔵の訳業が記されている『開元釈教録』や『宋高僧伝』などの資料には、しばしば復礼が綴文や筆受の任に当ったことが記されている。天冊万歳元年（六九五）に則天武后の命によって明佺らが編纂した『大周刊定衆経目録』巻十五（大正56・四七五c）には、同年の十月二十六日の項に「翻経大徳大福光寺復礼」（大福光寺とは大福先寺のこと）とあり、翻経僧としての復礼の名が見出される。当時、彼は洛陽の大福先寺に住したことが知られるが、主に住したのは長安の大興善寺であった。豊かな語学力を駆使して文を綴り義を裁めることに才能を発揮した彼の翻訳歴の中で、実叉難陀訳『華厳経』八十巻の訳業への参加は、復礼と『華厳経』との関係を考えるうえには見逃すことができない。この新訳『華厳経』の完成（六九九）に先だつこと十四年の垂拱元年には、旧訳『華厳経』入法界品の脱文を地婆訶羅のもとで法蔵らと共に補訳した。この補訳の年時については、

『探玄記』巻一（大正35・一二二b）には永隆元年（六八〇）のこととされるが、吉津宜英「法蔵の著作の撰述年代について」（『駒大仏教学部論集』第十号、昭和50年11月）の推定によれば、『開元釈教録』巻九（大正55・五六三c～四a）の垂拱元年（六八五）説に、より信憑性があると指摘されている。復礼が地婆訶羅の訳場において翻訳に参加していた時期に『十門弁惑論』が著されていることも特筆すべきことである。

訳場における多くの翻経僧との交友とは別に、復礼との交渉をもった人々がなかったわけではない。それは鳥窠道林（七四一―八二四）と道氤（六六八―七四〇）とである。前者は『景徳伝灯録』巻四（大正49・八三二c）などに記載があり、道林が二十一歳の出家以後に復礼を訪問し、『華厳経』『起信論』を学んだが、彼が復礼に問答を求めたところ返答が与えられなかったとある。道林が武周朝期よりも数十年も後代の代宗の時代に活躍した禅僧であることから、復礼の在世時に交渉があったとは推定しがたい。後者は『宋高僧伝』巻五（大正50・七三四b～c）にみられ、道氤は唯識や因明に秀れ、玄宗皇帝の代に重んぜられた人であり、彼には『御注金剛般若経宣演』二巻（大正85巻所収）などの著作がある。復礼が道氤に対して西方讃一本を作成せよと命じたところ、しばらくしてそれが完成しその出来ばえに復礼が驚嘆したというものである。鳥窠道林に比して道氤の場合は復礼と重なった時代に生きたという点では資料としての価値は高いと思われる。

以上のように復礼は学徳を具備した高僧として位置づけられているが、『十門弁惑論』という書の性格からは護法の人であり、『真妄頌』や翻経の功績という面からは華厳教学を隆盛に至らしめた思想家であったといえるのである。